

文は能樂諸流篇、地方能樂篇の二部に分れて居るがこの論述するところは殆ど能樂諸派の傳承に關するものである。前篇に於ては先づ觀世四代の事蹟と相承の次第を述べ次いで「金春史考・喜多源流考・福王氏族考・觀世梅若兩家の確執に及び後篇は泉州堺と能樂・京觀世の由來・加賀藩の能樂・明治維新後の京阪能樂界を取扱つて居る。篤學なる著者は文獻の廣き涉獵によりこれらの諸問題に精到なる研究を加へ穩當なる結論を發見してゐる。殊に後篇の諸論及前篇第四第五等は從來多く取扱はれざりしものとして注目すべきものであらう。能樂がもつ文化史的意義或は諸派を分ちし社會的理由等これらの研究が當然含むべき背景部分の考察が不足なる憾みはあるが而もかゝる文獻的研究はそうしたものと離れてなほ獨立の意義をもつものでありこの點著者の勞を多すると共に續篇たる能樂文獻篇、能樂伎藝篇の速かなる刊行を待つ次第である（菊版三三三頁、價二・八〇、東京春陽堂發行）〔肥後〕

●醒醐雜事記

中島 俊司編

昨春醒醐天皇一千年御忌を修した醒醐寺は、數年前より此の爲に同寺史編纂を計劃開始してゐた。然し悠遠偉大なる同寺の修史は數年の年月にて及ぶべくもなかつた。古來同寺には二つの寺誌が存してゐた。一は慶長のころ、義演准后の自ら編する醒醐寺新要録であり、一は文治二年、三寶院に上座の職にあつた慶延が、編した醒醐雜事記である。前者は當時殘存せる史料に準據して作られたるも未だ未定稿であるが、そこに収録せられた史料早くも煙滅せるもの、多い今日、更にその書の編纂に根幹を與へたものこそは、後者なのである。慶長九年二月、塔頭釋迦院の經藏を開き聖教二百餘卷を披見せる折、義演准后偶々發見せるものこそ後者、即ち醒醐雜事記、又は慶延記と稱せらるゝ十五卷であつたのである。既に四百餘歳于今相殘奇妙々々」とその卷第一に與書として手書せる准后の慶びを、今本書を手にして想見する。

本書の刊行せらるゝ迄、研究者は醒醐寺新要録の影寫本により所引の慶延記を求め不便を忍び、續群書類從第九百二十三、雜部七十三（第三十一輯下、雜部）によら

ねばならなかつた。而し後者所收のものは醍醐寺雜事記とあり、上之上に醍醐雜事記卷第九、上之下に卷第十、下之上に卷第十二、下之下に卷第十三を宛つる四卷に過ぎない。今同書と本書とを比檢するに卷第十三は同じく宮内省圖書寮本によつて校定されてゐるが、多くの異同がある。煩を厭うて之を擧げぬが、宜しく兩書によつて見られたい。如何に本書が脱字、闕字が補はれてゐるかを。但し魯魚の誤りの爲か意の通せぬ所もないではない。本書菊版六六五頁。卷頭に圖版五葉を收め、慶延自筆本卷第七、並びにその裏書(久壽二年具注曆)、卷第十五義演本與書(以上醍醐寺藏)圖書寮本卷第十三、並びにその裏書(慶延自筆)を示してゐる。慶延の原本、書寫本多く散佚し、纔かに數卷存するのみ。之を底本とし、慶長年間義演の書寫に係る十五卷の冊子を准底本となして校合し更に、卷七、八、九、十、十三の五卷の裏書(紙背文書)を残すなく容れ、殊に卷七、八の紙背の具注曆は朱黒の二度刷とする。その心は欄外鼈頭にも現はれ、義演本目錄を轉記せるのみならず、編者の増補せる所に示されて

る。

慶延とは「予仕八代之長史知一寺之巨細兼亦聞往事訪故老有要記之號曰醍醐雜事記」と序の一節にある所により知られ、又本書の成る所以も明らかになる。「延喜天曆勅願の巨刹の莊嚴を知るに足り、巨細の注記に依りて鎌倉初期以前醍醐寺の盛衰興亡の跡を伺ふに足るべく、實に東大寺要録及び東寶記等の先蹤をなせるものにして而もその記載は遙に是等を凌駕するものありと謂ふべし」と本書の序言にあるを以て蓋ふ事が出來やう。此處に於て苦心收録せられたる紙背文書等は更に輝きを増すであらう。

文治二年、勝賢僧正の命により、慶延は同じき上座禪忠と共に編算せる醍醐寺諸庄文書の目錄を追輯し、こゝに醍醐雜事記六十三卷全く成つたといふものゝ、現存せる所のものは十五卷、義演當時も十五卷にして、此の時成るの日、果して六十三卷存したるや否や既に疑はれてゐるが、若しこの説が受容せらるれば、本書の價値は更に大となる。

蓋しかゝる史料の刊行は、如何に多くの勞苦を伴ふものであるか、窺ひ知れぬものがある。近ごろ記録文書の刊行せらるゝものゝ多いことは慶賀に堪へぬが、更にその當事者に厚い感謝を拂ふことを忘れてはならぬ。跋に編者の辭があり、此書刊行には自ら寺史遲延の故を以て經費勞力を負擔し、一方亡き肉親五人の冥福を祈らんとする温き編者の血と涙とがあるのを知る。

本書はかくして出で來り、此の如き價値を有し、且續群書類従本所收に比し、數等優れるが故に、善本として推奨するに躊躇しない。自費上梓せられたる中島氏は非賣品なるも、限定三百部の中殘部を實費五圓にて頒布せらるゝ由であるから、この點からも研究者に便を與へる事を感じたい。(菊版六六五頁、非賣品、京都伏見區、醍醐寺)〔寺尾〕

●書目集覽 貳

禿氏 祐祥編

昭和四年二月、書目集覽壹に寛文、元祿の兩書藉目錄とを掲載したが、今回その後を承けて本書は享保書藉目

録四(享保十四年版、原書名新撰書藉目錄)、寶曆書藉目錄三卷(寶曆四年版、新增書藉目錄)、明和書藉目錄(明和九年即ち安永二年版、大増書藉目錄)より成る。此の兩書によつて江戸時代の出版業者、書藉販賣業者の手に成る書藉目錄は大體に於て完備したといふ事が出来る。即ち普遍的の出版書目は網羅、系統づけられたものであり書史學上頗る貴重なものである。特に單式印刷によつたものであるから原本を髣髴たらしめてゐる。

第壹の寛文、元祿のと、本書とを比較するに、後者の書目には跋語があり、作者、書肆を知り得る。享保の書目の特徴としては、時として漢文で内容を掲げ、著者の傳記を載せて解題してゐる外、元祿のに見えた好色類並樂事等を缺くは、享保七年よりの好色本發禁の反映である。寶曆以後のには解題を缺くも、體裁は大體前に倣ふも、此書目から始めて現はれた標目に諸子、印譜、節用集、天文書等がある。書目の順序として佛書、儒書、經書以下大略學術書を掲げ、最後の卷は歌書、狂歌等趣味に關するもので、歌留多、版畫、地圖、名所繪、繪双

六までのせてゐる。これは現今の書目と對比して見ると面白い。

編者の親切は單式印刷のみならず、解説、誤字一覽表に示されてゐる。一覽表により、本文の誤字、脱字、當字の訂正が出来、解説により本書目以外の傍系的書目の出版を知り得る。面白き事は、嘉永安政の頃出版された寫本唱導集品目なる寫本目錄に「若し御手元にて御寫し取扱下候は、一巻に付見料貳匁づゝと相定め」云々といふ奇抜なるものあるを知り、更に興味を此の方面に向けられるであらう。

本書は三百部の限定版で、書史學上重要な位置を持つものであるといへ、非營利的な出版といはねばならぬであらう。此の點、此の業績を遂げられたる編者に捧げる感謝と共に東林書房店主にも同様感謝の辭を捧げる。

(菊本文四七八頁、價五・〇〇、京都市烏丸通二條、東林書房)〔寺尾〕

●紫香樂宮趾の研究

滋賀縣保勝會

著者肥後和男學士は前に大津宮趾の研究に際して遺趾の發掘と同時に文献的考察を試み兩方面から結論を導き出さうと努めて調査方法に独自の境地を拓かれた。本書にもその態度が鮮明に現れてゐる。

内容は遺趾の調査報告——一、信樂谷と内裏野、二、調査の經過、三、遺跡と遺物及び、四、文献による研究と、五、結論より成る。前者に就いて斯かる大發掘を成功的に成し遂げた裏にひそむ辛苦に敬意を表したい。文献的研究は續紀、正倉院文書等の斷片を繼ぎ合せて宮寺の外觀變遷を攷究しそれによつて遺趾の性質を明らかにしようとする非常なる努力の俛ばれる一文である。遺趾の發掘はかく文献の採集をまつて全きものとされるのであらう。其上に立つて文化史的方法を試みる著者の意圖の發展を祈り古代史上の重點である、紫香樂宮について貴重な報告の出でしを篤志者に紹介する。(四六倍版、本文九九頁、圖版二二葉、定價一・二〇、滋賀縣保勝會發行)〔藤〕

日本文代叢考

京城帝國大學法文學會編